

# 音仮名と訓仮名を交えた表記

万葉集仮名書き歌巻と和歌木簡資料を中心に

八木京子

## 一 はじめに 文字テキストにみる音訓交用表記

まず、「音訓交用」という用語について確認したい。一般に音訓の交用と我々が用いる場合、今で言うところの漢字仮名交り文を意味するところが少なくない。即ち、字訓文字で、名詞・動詞などの自立語が表記され、またそれに付属する「てにをは」などの「辞」が、字音仮名で書かれるといった表記体のことである。<sup>①</sup>

ひとつの文における音訓の交用を問題にする場合、沖森卓也氏「万葉仮名交り文の成立」が、仮名文の成立を展望して次のように述べていることが注意される。<sup>②</sup>

記号内容主体表記から訓仮名が生じ、次いで訓字主体表記に音仮名が交用表記されるようになったのであるが、これが万葉集の表意主体表記の諸巻に多く見える漢字万葉仮名交り文である。（傍点引者）万葉集に見られる万葉仮名交り文、また平安朝のいわゆる仮名文まで

を射程に据えた論において、その用語は有効に機能している。

しかし、沖森氏自身、後に発表された「音訓交用について」<sup>③</sup>「人麻呂歌集とその後の上代表記」の各論では、「音訓交用」の語を一単語内の音仮名と訓仮名の交用に限定して用いているもので、実際のところ、この語のもつ術語としての有効性を問うことは難しい。論者によって、その場その場で使い分けられているというのが実態に即した理解であろう。

いま、本論では「音訓交用」の用語を、単語をひとつの単位とした「音仮名と訓仮名の交用」として扱うことを確認しておきたい。

音仮名と訓仮名の交用については、夙に橋本四郎氏「訓仮名をめぐって」の論に言及がある。<sup>④</sup>橋本氏は、単語内の訓仮名の位置を調べること万葉集の交用例を指摘し、その結果、「訓仮名」と「音仮名」は互いに排他し合う関係にあることを導き出した。

音仮名と訓仮名の両用が避けられるのは、仮名という共通の性格が、両用を本質的に拒むからであろうが、（中略）かりに文節を単位として見た場合、すべての条件を排した全く無秩序な

混用は、すでに説かれたように（澤瀉久孝『万葉集注釈』一六〇・六〇六の注その他）、極めて少ない。（傍点引者）

氏が述べるように音訓仮名の混用は、特別な理由 即ち、訓仮名が「語」や「分節」の切れ目を示している場合や、「意味」による配慮が認められる場合など を除外すれば、万葉集のなかに多く見られるものではない。

稲岡耕二氏が、万葉集全巻を精査されたところによれば、一続きの語における音訓の交用はおよそ四百近くの用例が数えられるという（総延べ数による、異なり語数ではない）。これは、述べたような特別な事情による例を除外せずに、全てを採り上げた数によるが、万葉集全体のなかで四百という数字はやはり決して多いとは言えないであろう。<sup>5)</sup> 音訓仮名の混用が、原則として回避されるという指摘は、それが文字テキスト上の問題整理にあつていまなお有効な見解であり、我々に国語学界のいわゆる「常識」として自覚されているのが現状であろう。この原則は、次に見るように万葉集だけではなく、「古事記」テキストにおいても、基本的に貫かれている。<sup>6)</sup>

古事記の表記は、本文の読解を容易かつ確実ならしめるために、さまざまな工夫が施されている。音仮名に訓仮名を混じえる際の方法も、右の目的を実現させるための一環として捉えることが出来る。（傍点引者）

山口佳紀氏が述べるのとおり、古事記においても、「読む」ための特別な方法として音仮名と訓仮名が交えられているのであり、全く無秩序な混用がなされているわけではない。

いずれにしても、音仮名と訓仮名が文字テキスト上で交用される場合は、書記の方法としての確たる理由が存在する例に限られ、それ以外の

混用は見られないという一貫した姿勢が以上の諸論から知られるところであった。

## 二 上代文字資料の訓仮名

### 「訓仮名」の生成に関する再検討

前節で見たように、万葉集、古事記の中で音・訓仮名が交用されるときには、それぞれ書記機能上の特別な理由をもつと考えるのが現在の一般的な理解である。しかし、近時、発見が続く文字資料の音訓交用のなかには、明らかな理由を窺えない事例が少なからず見られ注意を要する。これらの音訓交用表記は、七世紀後半の印旛郡龍角寺文字瓦の地名表記や、「美濃国戸籍」の人名表記などに見られるが、その在り方が全国各地に散らばっている点、そして、有識層に限らないという点で、まことに興味深い様相を呈している。

地名・人名などの「固有名詞」だけでなく、ここ数年、発掘が相次ぐ木簡からは、和歌資料である難波津の歌や、荷札に書かれた物産名などさまざまな音訓交用の実例を見ることが出来る。<sup>7)</sup> これらの文字資料からは、音訓を交用した「仮名書き」が当時の一般的な書記様式として知られ、書記者の側に立つた自由な表記の実態がいま改めて問われるべき段階にきている。

ここに取り上げる文字資料は、整えられた文字テキストである万葉集・古事記の音訓交用とは、もちろん本来的に区別して考えるべき資料であり、先に見たような「テキスト」から帰納的に導き出された音訓の交用原則について、それを正面から否定し去るものではない。

しかし、敢えて誤解のないように述べるならば、文字テキストにおけ

る用字の「水準」とは、合理的に整えられた文字用法の頂点として初めて、そこにありえたと考えざるを得ないものである。万葉集や古事記に見られる体系だった用字法は、特別な識字層、知識階級による「用字圏」として一括りにされるべき層 においての「水準」ではないことは論を俟たない。常に「仮名書き」という書記形式が、数の論理のなかで、万葉集や記紀の一字一音書きや、紙に残された数葉の文書資料にばかり基準が求められてしまうことには、ある意味で、既に「規範」を「規範」として自明のものに据え、ただ盲目的に「仮名書き」という書記体すべてを篩<sup>ふるい</sup>にかけているに過ぎないのではないか。

いまここで問わなければならないのは、このような「規範」で捌くことのできない表記 それは規範以前の、と言い換えても、もはや性急なものの謂いではないであろう、にこそあるのであって、それが一般原則から外れる「無秩序」な表記ということと片づけてしまつとしたならば、それはまったくの論理の転倒でしかない。問題の核心は、「無秩序」を「無秩序」と感じもしなかったであろう、「仮名」文字に対する自由な文字用法の実態そのものにある。

ここまで述べてきたところで、まずもって確かめて置かねばならないのは、従来より定義づけられてきた、「音仮名」「訓仮名」の基準とは、どのようなものであったのかという点であろう。訓仮名<sup>9</sup>について、橋本氏はその成立、定着を次のように想定する。

万葉仮名の名称で一括される文字群の中に、漢字音を借用する音仮名と、訓を利用する訓仮名の存在することは、周知の事実である。字形に伴われた意義表象喚起力を放擲したのが音仮名であるとすれば、これを字形・語音の両面から二重に切り離したのが訓仮名である。

また、津之地直一氏は次のようにも言う。<sup>10</sup>

訓仮名とは、漢字を表音文字として使用する中であって、原漢字の音ではなく、その訓（原初的に考えれば、漢語に対する国語訳の言葉である）を借りて、その音声と同音声である他語の表示に使用するものであって、その使用過程（思考過程でもある）には、その漢字からまず音を切り捨て、次に国語読みである訓を置き換え、更にはその訓の持つ意味を切り捨てて、同一音声を持つ他語に当たるといった二重三重の過程があり、音仮名の使用に比してかなり複雑な過程を意識の上に持つ用字法と言わなければならない。従つてこの表記は表音文字としての用法中では、音仮名より後れて発達したものであり、かつその使用は例歌でもわかる通り、正訓の中で補助的に使用されているのである（傍点引者）。

津之地氏の論は、訓仮名の成立に関し、音仮名より後れて発達したということとを、明確に指摘している点が注目される点である。橋本氏の論では、その先後関係について明らかに述べていないが、「訓仮名に見られる意義の二重の切り棄ては、それだけに利用に伴う抵抗の大きさを予測させる」（P23）と、別に述べていることからすれば、訓仮名が早い時期に一般的に用いられていたということをおそらく想定しない上での謂いと思われる。

一方で、川端善明氏は、以上に指摘したような橋本氏の論を継承しながら、

訓仮名の原理自体は朝鮮三国での漢字使用の中にあつたが、朝鮮ではそれは展開しなかった。それに対して、正訓字と音仮名の間者としての訓仮名を、意味への関連と音への関連の相関に立つて運用することは、訓仮名への定着までの時間のうちに遂げた、漢字の日

本化の<sup>⑪</sup>一つであつた(傍点引者)。

と述べ、「訓仮名」はやはり段階を追つて日本の文字体系のなかに、定着したと考へておられる。氏が述べるように、訓仮名が定着するまでに、一定のスパンを見込むことは、橋本氏が述べたような訓仮名の成り立ちを考えると、然るべき判断であると思われる。論者がいまここで問題としたいのは、その「定着」の「時期」をいつごろに認めるかという点である。

少なくとも「字訓」に関しては、推古遺文に幾つかの字訓表記が見られ、この時代には定着していた訓がかなりあつたことが知られるが、「訓仮名」については、その定着時期を推測することは甚だ難しい状況にあつた。このことは、いま残されている金石文の文字が、基本的に訓仮名を用いないという資料的限界に起因する。現象面において、いま見られる金石文資料から単純に帰納するならば、確かに訓仮名の発生は、音仮名にかなり後れるものとして考えざるを得ないであらう。しかし、先に述べたように、「字訓」の定着が推古朝まで遡れるとするならば、「訓」と「音」の一致がその時点でなされていたことが認められ、「訓仮名」の発生条件は、少なからず整つたということになる。

早く六世紀後半に見られる固有名詞「額田部」(鳥根県松江市大庭町岡田山1号墳出土円頭大刀銘)は、「ヌカ」「タ」「ベ」の音にそれぞれ、「各」「田」「ア」が宛てられており、訓仮名の成り立ちを予想させるものである。

そもそも、固有名詞の訓字表記は、それを字訓と考へるか、仮名と考へるかの判断が難しい。以下に例を示すが、「開中費直」(隅田八幡宮人物画像鏡(六世紀前半か))の「開中」が「河内直 百済本記云、加不<sup>カフ</sup>至<sup>チ</sup>費直」(欽明紀二年)とあるように、「カフチ」と訓めるとすると、「中

が「ウチ」の訓に基づいて用いられたことになるが、これが訓によると確定できるかは、「開」の訓みとともに微妙と言わざるを得ない。

「法隆寺金堂薬師仏光背銘」(推古一五(607)年)には、「池辺大宮治天下天皇(用明)」「小治田」とあり、それぞれ地名表記が訓字で記されている。この「ヲハリ」は、「天寿国曼荼羅繡帳銘」(推古三〇(622)年)、『上宮聖徳法王帝説』所引)には、「尾治王」と記されているもので注意を要する。「小治」が正訓としてあつたとすれば、この「尾」は借訓と考えられ、その成立時期には異論もあるものの、早い段階での訓仮名の用例として注目されるものであろう。なお、「天寿国曼荼羅繡帳銘」には、「孔部間人皇女」(「穴穂部間人皇女」、『日本書紀』、「間人穴太部皇女」、『古事記』)などの訓字表記も見られる。

また、法隆寺に献納された命過幡には、「壬午年」(六八二年か)の年紀をもつ幡があり、「壬午年二月飽波書刀自入奉者田也」と書かれている。この「者田也」が、他の銘文の末尾にある「幡也」を仮名で書いたものだとなれば、この事例は、「訓仮名」の文字資料として指摘できる例であらう。このケースなどは、かなり自由に、おそらくは一回的に訓仮名が用いられた背景が知られ、当時の文字遣いを残す資料として興味深いものである。

同じく幡銘に、「癸亥年山ア五十戸婦為命過願造幡也」<sup>⑭</sup>とある「五十戸」の表記は、所謂、熟字訓と呼ばれるものであるが、癸亥年を六六三年であるとすれば、<sup>⑮</sup>これもまた、七世紀半ば(天智二年)の文字として注目される。「サト」は、天武末年にはじまつた行政区画である「里」制を早くも窺わせるもので、石神遺跡木簡(七世紀半ば以降)にも、「物部五十戸人」「日下五十戸人」などがある。また、飛鳥池遺跡(七世紀末)の木簡に、「五十戸」<sup>⑯</sup>、森ノ内木簡(七世紀後半)に、「五十戸」と



ある他、また観音寺遺跡木簡にも「五十戸税」の文字が見える。<sup>16)</sup>

また、「山ノ上碑文」(辛巳年・六八一年)に見られる、冒頭の「辛巳歳集月三日記。佐野三家定賜建守命孫、……」の部分に用いられる、「みやけ(屯倉)」は、「三家」と書かれており、訓仮名による用法と考えることができる。

そのほか、地名表記であるため、字訓との一線がひき難い例ではあるが、七世紀第三四半世紀とされる印旛郡龍角寺文字瓦の用例、「赤皮真」「麻布」「朝布」などを挙げることができよう(千葉県印旛郡栄町龍角寺五斗蒔瓦窯跡 栄町病院建設に伴う埋蔵文化財調査報告書<sup>1997</sup>)。

七世紀の木簡の例では、難波宮木簡(七世紀半ば)一号に、「秦人凡國評」(オホクニカ)とある例や、また滋賀県大津遺跡木簡(七世紀半ば)に、「賛 田須久」とあるような例が比較的古い訓仮名の用例として指摘できる。

以上に掲出した文字資料について言えば、幡銘の資料は、従来、養老年間に比定されていたものであり、文字瓦の史料は、新しく調査報告された文字資料として注目される例である。これら新出の事例を確認しながら、少なくとも言えることは、「訓仮名」は、字訓が施されるようになった頃からさほど遠くない時期に、普及(もちろんそれは地方にも波及)していったと考えられることであろう。

しかし、その「普及」ということであるが、このような訓仮名の在りようは、川端善明氏が、次に述べるような「仮名」の「均質化」として捉えられる性質のものなのだろうか。川端氏前掲論文は、美濃国大室戸籍の交用表記について、次のように述べる。

殊にその戸籍帳において、訓仮名がかなり多く用いられ、音仮名と無原則的に交用されている事実があげられる。(中略)もとより短

な人名に過ぎず、交用に原則など不要であつたとするならばそれまでであるが、逆に言えば、このような場所で徐々に、音仮名、訓仮名の仮名としての均質化が進んだのであろうとし得る筈である(傍点引者)。

ここで問題となるのは、交用表記が無原則にとられる前提として、音・訓仮名の「均質化」ということが、仮名文字の展開相を見わたす視点の中で、予測的に述べられていることである。<sup>17)</sup>ここでア・プリオリに設定されている音仮名と訓仮名の出自の「別」というものは、そもそも当初から、日常的に「意識」され、然るべき書記法として「認識」されたものだったのだろうか。問題を整理するが、これらの「均質化」は、文字言語の精度が上がったために互いに止揚された結果なのか、音・訓仮名に対する認識の低さが起因した「均質化」なのか、ということである。

文献テキストの書記体は、ある意味においてきっちりと整理された姿をもつて、我々の前に存在する。そして、文字運用の大勢のなかでは、仮名の出自を截然と書き分けることが、「正格」としての書記の然るべき形式であつたと考えられる。このような書記様式を、ひとたび絶対的なものに仮定するとき、美濃国戸籍にあるような音訓を交用する書記体は、そのさらに一歩先にある、仮名の精度の高まつた状態として、発展的に見られがちであろう。

しかし、現実に行われていた書記法は、このような正用体ばかりではなく、それを使用できる上位層に包み隠されるかたちで存在した書記様式、即ち、個々の書記者による、一回的な「自由」な書記の存在、俗用体の存在を疑うべきものではない。<sup>18)</sup>

俗用として常に底辺にあつたであろう書記体は、テキストに表向きに

現われてくる正用体とはまったく別の様式であり、なおかつその存在こそが、草仮名、平仮名という音・訓の出自を問わない「かな」に連続していくものと考えられよう。

### 三 万葉集の仮名書き歌巻にみる音訓交用表記

本節では、万葉集の仮名書き歌の「訓仮名」について考えたいと思う。

古事記・日本書紀・歌経標式・仏足石歌などテキストの範囲をかなり広げて、「訓仮名」の使用は、古事記歌謡（清寧記）の「五十」「三」「魚簀」の三例と、続日本紀歌謡の「丹」「社」の二例のみである（続日本紀宣命に「ハ」「部」「津」の一例がある。橋本氏P28）。すなわち、それ以外の歌という歌は、すべて「音仮名」で仮名書きされているということになる。

文字テキストの歌が、すべて音仮名で書かれるという統一志向のなかで、万葉集の仮名書き歌にだけ「訓仮名」が少なからず現われてくるという事態は、「万葉集」というテキストを考える上で、どのように整理されるべき問題なのだろうか。「歌」というものが本来的にも「俗性」ということと前節までに述べた「俗用体」との相関をここでは考えたいと思う。

「意味」を付帯するもの

君我由久道乃奈我乎久里多々祢也伎保呂煩散牟安米能火毛我母

（三七二四）

相模祢乃乎美祢見所久思和須礼久流伊毛我名欲妣吾乎祢之奈久奈

（三三六二）

和我世古乎夜麻登散夜利呂麻都之太須安思我良夜麻乃須疑乃木能末可

（三三六三）

母毛豆思麻安之我良乎夫祢安流吉於保美目許曾可流良米已許呂波毛倍杼

（三三六七）

武蔵野尔宇良敞可多也伎麻左尔毛乃良奴伎美我名尔良尔低尔家里

（三三七四）

左刀妣等能見流目波豆可之左夫流兒尔佐度波須伎美我美夜泥之理夫利

（家持 四一〇八）

和我勢故波多麻尔母我毛奈手尔麻伎氏見都追由可牟乎於吉氏伊加婆乎思

（家持 三九九〇）

多麻保許乃美知尔伊泥多知和可礼奈婆見奴曰佐麻祢美孤悲思家武可母

（家持 三九九五）

左乎思鹿能布須也久草無良見要受等母兒呂我可奈門欲由可久之要思母

（三五三〇）

水都等利乃多々武与曾比尔伊母能良尔毛乃伊波受伎尔于於毛比可祢都母

（三五二八）

いま、仮名書き歌巻から音・訓を交えた歌を幾つか採り上げた。は、東歌の用例、は、家持の用例である。については、

の極に「正訓」の要素が強い例をあげ（二音節のものを含む）、その対極と考えられるに「訓仮名」の要素が比較的強い例をあげた。

これらの仮名書き歌の訓字表記に関し、

真仮名統一の中から概念語だけが（そのすべてではないにしても）抜け出そうとする、それは概念語の所在を視覚的に分節するであろう。巻一四の東歌では、音仮名統一の表記の中に、一音節正訓字に限って交用される。一音節という形態の中で、正訓字は言わば訓仮

名性を与えられているとも考えられる。先に、訓仮名が正訓字へ連続的であるとしたのと、それは表裏するであろう(傍点引者)。

と、川端氏が端的に述べるように、仮名書き巻にあっても、一音節の概念語だけが正訓字で表記される例は少なくない。

これらの仮名書き歌巻の一音節正訓字は、限りなく「訓仮名」に近づいていくという点において、「形式<sup>スタイル</sup>」としての「仮名書き」を保ちながら、その「存在」を全うさせている。音仮名表記に交えられる一音節正訓字は、その「異質さ」を、一音節という「表音」機能のなかに回避させているように思われる。すなわち、これらを「仮名」と考える余地を残すことが、音訓交用による違和感を感じさせない要素として働いているのである。

いま述べたようなことは、の用例において、「仮名」の要素のより強いものと、それらを考えることができるように思われる。「鹿」「水」は、確かに「シカ」「ミツ」という意味への傾斜が窺えるものの、「思鹿」「水都」と、二音節に分けて書かれる在り方からは、やはり一音節の「訓仮名」として、少なくとも機能の面においては、それが用いられていると考えざるを得ないだろう。

「意味」を付帯しないもの

為部母奈久 ( 882 ) 阿麻能見虚 ( 894 ) 辺多天留 ( 866 ) 義無母阿良牟遠 ( 897 ) 御宇良佐伎 ( 3508 ) 緒可  
 敵 ( 3575 ) 船人毛鹿子毛 ( 3627 ) 水緒多要受 ( 3908 )  
 念意緒 ( 3950 ) 弥不根 ( 4045 ) 之津乎 ( 4061 ) 安  
 利蘇野米具利 ( 4049 ) 等己之部 ( 4106 ) 可見能大御世 ( 4111 ) 安夜女具佐 ( 4089・4101・4102・4116 ) 目都良之

4117) 和須礼加禰津流 ( 4346 ) 和須良牟砥 ( 4344 ) 良  
 奴日 ( 4331 ) 波名爾見牟 ( 4308 ) 知波江 ( 43 40 )  
 これらは、仮名書き歌巻の中で意味を捨象して用いられた「訓仮名」を、橋本氏の調査結果(前掲論文 P 24 ~ P 25)を参考にしながら挙げたものである。

橋本氏によれば、仮名書き歌巻に見られる訓仮名は、「驚くほど少ない(橋本氏 P 24)」、いことが指摘されており、このことは、万葉集において「うた」は音仮名で書かれるのが大勢であることを物語っている。それは、既に見たような記紀の歌謡が、徹底して音仮名のみで書かれる在り方に通い合うもので、それは「うた」に限らず、仮名書き体の「規範」的な、いまその照準を、整理された文字が現出するテキストに合わせる、態度であると思われる。

しかし、ここで文字テキストとして「採録された」歌の仮名書きに水準を合わせつつも、音訓の交用は、万葉集テキストにだけ、消極的ではあるもののその存在を顕わにすることにはかわりはない。

ここに指摘した音訓の交用例で重要なのは、これらが、仮名書き巻のいずれの巻に偏ることなく、また作者も限定されることなく、万葉集テキスト全般に押しなべて見られるという事実である。このような在り方を見る限りでは、「原資料」や「個人」の別に拠らない、テキスト全体に現われる書記法として音訓仮名の交用が確認できるもので、そこに「一般性」なり、「普遍性」なりということを見て取ることは、さほど難しくないように思われる。

先にも触れたように、稲岡氏の調査によれば、万葉集の音訓交用は四〇〇近くの例が数えられるという。もちろんこの総数は、稲岡氏も断つておられるように、仮名書き歌巻以外の例や、訓仮名かどうか判断のつ

き難い例を含み、この数がそのまま橋本氏の言う「無秩序」な交用例に相当するわけではない。しかし、万葉集に四〇〇という数は、それが絶対的に忌避されるべきものであったと想定するには、どうにも微妙な数として捉えられてしまうのではないか。

いま見たような音仮名中心の仮名書き歌に、訓仮名が散在する在りようは 訓仮名というものが、ゆくゆく淘汰されてゆくべき性格にありながら、「万葉集」という編集テキストにのみ若干の命脈を保っている。未整理な仮名書きのすがたとして、これらを考えるべき問題ではないか。広く万葉集について論じられるようにそれをいま、私的歌集の集合体と考えることも、この問題にひとつの解答を与えてくれるであろう。

木簡に見るような文字資料と万葉集テキストに共通して見られる、音訓を交用する仮名書きは、既に常用体（俗用体）として多く用いられていた書記法が、編纂という網をすり抜けながら、万葉集の中にすがたを覗かせたものと、それを考えることができるように思われる。

#### 四 上代木簡資料にみる難波津歌の音訓交用表記

前節までに、万葉集の仮名書き歌巻に見られる音訓の交用を扱ってきたが、次に、木簡などに記される仮名書き和歌の幾つかを見ておきたい。まず掲げるのは、近年、相次いで発見が続く難波津の歌の和歌資料に見られる音訓の交用である。

徳島市国府町観音寺遺跡木簡

（1998年出土）（七世紀後半）【木簡】

（『徳島県埋蔵文化センター 調査概報 2 集 観音寺木簡 観音寺遺

跡出土木簡概報』1999・3、釈文は、『木簡研究』二十一冊1999・11）

「奈尔」 「矢己」<sup>(19)</sup>

奈尔波ツ尔作久矢己乃波奈×

石神遺跡（第十五次調査）出土木簡（2002年出土）

（伴出木簡に「乙丑年」天智四（665）年ほかの木簡あり）【木簡】

（『飛鳥資料館展示資料』2003・2、2003・3、『木簡研究』二十六号2004・11）

（表）奈尔波ツ尔佐児矢己乃波奈□□×

（裏）□□倭マ物マ矢田マ丈マ□□×

藤原京跡左京七条一坊西南坪木簡

（2001年出土）（大宝初年頃か）【木簡】

（『木簡研究』二十五号2003・11）

・「奈尔皮ツ尔佐久矢己乃皮奈泊由己母利伊真皮々留マ止

佐久「」「」識「」「」与「」

・「」皮皮職職馬来田評「」

平城宮跡木簡（2000年出土）（和銅六〔713〕年頃か）【木簡】

（『平城宮発掘調査出土木簡概報（三十六）』

釈文は、『木簡研究』二十三号2001・11）

・「<sup>(里カ)</sup>矢己乃者奈夫由己<sup>(利)</sup>伊真者々留部止

・「<sup>(本)</sup>伊己冊利伊真役春マ止作古矢己乃者奈

平城宮跡木簡（奈良時代）【木簡】

（『平城宮発掘調査出土木簡概報（十九）』

釈文は、『木簡研究』九号1987・11）

・「<sup>(里カ)</sup>請請解謹解謹解申事解奈尔波津尔

・「佐久夜己乃波奈<sup>(布カ)</sup>」

高岡市東木津遺跡出土木簡

（1998年出土）（九世紀以降か）【木簡】

（『木簡研究』二十三号2001・11）



「はルマ止左くや古乃は」

以上の諸例が、難波津の歌の音訓交用例である。以下に、各々の木簡の発掘概要について述べる。

は、徳島市国府町観音寺遺跡から出土した木簡である。その伴出木簡から、七世紀末（天武朝ころ）のものとして推定され、地方官衙遺跡から出土した七世紀末の難波津木簡としては、非常に貴重な例と言えよう。

は、近年、出土報告された斉明朝から天武朝の遺跡となる石神遺跡木簡の例である。は、藤原宮期後半の池状遺構から出土したものであるが、伴出木簡から判断して大宝初（701～702）年かと推定されている。は、平城宮の第一次大極殿院の西北隅部、佐紀池の南の溝から出土した木簡であるが、伴出木簡に、和銅六（713）年の年紀木簡があることから、遷都後まもないものと推測されている。は、年代推定が難しいものの、文字の草化の度合いからは、九世紀後半としておくのが妥当とされている（遺跡の最上層からの出土であり、考古学的年代とも矛盾しないと思われる）。例の少ない平安時代前半の貴重な平仮名資料である。<sup>(2)</sup>

を見て知られるように、多くの訓仮名が音仮名に交って用いられているもので、その日常的、かつ普遍的な在り方が注意される。なかでも、例に共通して見られる訓仮名「矢」は、七世紀から八世紀初頭の難波津歌資料において、固定化して用いられていると言つてよいほどの様相を呈している。

第二句・第五句に重ねて用いられる「さくやこのはな」の「ヤ」の音は、「法隆寺五重塔落書」（和銅四（711）年以前）に、「奈尔波都尔佐久夜己」とあり、「夜」の音仮名が用いられている。この落書は、五重塔の造立に関わっていた工人が、その記憶によってすさび書いたと推測されるが、そこに「ツ」を「都」、「ヤ」を「夜」と書いていることが注目

される。

この「夜（ヤ）」は、他の「難波津」和歌の出土例にも見える。平城宮出土土器墨書（弘仁年間（810～833）頃、『平城宮発掘調査報告』図版三五挿図18 P 14、『平城宮木簡』一P 6）に、「（ツカ）尔佐ノ波奈尔ノ久（夜己力）」とあって、ここにも推定であるが、「夜」と読みとれる文字が見える。<sup>(22)</sup> その他、滋賀県宮町遺跡木簡（1999年出土、八世紀半ば）に、「奈邇波ツ尔」「夜古」とあるほか、平城宮出土土器墨書（『平城宮出土土器墨書集成』一三〇号、奈良時代）に、「奈」「尔」「佐」「久」「夜」「九」、の難波津木簡に、やはり「夜」の音仮名が見られる。すなわち、奈良朝以降の難波津歌では、「サクヤコノハナ」の「ヤ」は、「音仮名」の「夜」の文字が、一般的に用いられていたと推測される（少ない例ではあるが、訓仮名「矢」から、音仮名「夜」への展開を辿ることができるように思われる）。

これらの事実は、「ヤ」の音要素について、「矢」とも「夜」とも自由に書かれるような在り方が、当時の書記のすがたであるということをも物語っている。このような自由な文字選択の在り方は、次に指摘するような、訓仮名や字訓をも自在に交えて記す書記法のなかで再確認することができる。

「奈尔皮ツ尔佐久矢己乃皮奈泊由己母利伊真皮々留マ止」

佐久 識識、「矢己乃者奈夫由己」 伊真者々留部止

伊己冊利伊真役春マ止作古矢己乃者奈」の例では、「矢」を初めとした多くの訓仮名が交用されており、特に注目される。いま傍線を施した文字が訓仮名であるが、例では、「矢」「真」「部」の三文字が、例では、「兎」「矢」「者」「真」「部」の五文字が、「訓仮名」として検出できる。さらに「では」「いまははるへと」の「ハル」のみが、「春」

と正訓表記されているもので、その一回的な自由な文字遣いが注意されるであろう(このことは、当該難波津歌を、「習書」と考えるか、「落書」と考えるかといった問題も含んでいよう)<sup>(23)</sup>。

また、歌に見られる、「止」の古韓音は、七世紀もしくはそれ以前の文字資料に多く見られる文字である。これらの文字遣いからは、古い時代の文字用法の上に立ちながら、文字の統一という意識以前敢えて言えば、意識化する必要のない場所 において一般的に用いられていた文字であることを予想させる。

さらには、当該木簡の「皮」(ハ)の字音表記にも注意を及ぼしたい。この字音仮名は、上代文献テキストには見出だせず、新しい字音資料として、近年、注目されている文字である。この「皮」は、記紀や万葉集に例がないものの、実用の中では、印旛郡龍角寺の文字瓦の地方工人の手と思われる例などがみられ、幅広い環境で用いられていたことが知られる。「皮」のごとき略体文字(但し、犬飼氏は略体文字ではなく「皮」の正字と考える)が用いられる場所は、格式ばった公的記録的な文書においてではなく、純粹に文字を書き留め、それが「読めさえすればよい」というような文字環境で、用いられたものと考えられよう<sup>(24)</sup>。

かような日常的な文字遣いということに関し、付言するならば、「ツ」(つの古体)が見られることも重要であろう。この「ツ」は、掲出したの木簡に見え、これら以外の難波津歌資料にも、滋賀県宮町遺跡木簡、平城宮出土土器墨書、平城京右京一条三坊出土木簡などに見られる。「つ」の字源については、さまざまな説があるもので未だに確定していないが、鈴木一男氏は、「鬪」の草体とし、東野治之氏は、「州」と推定している(音仮名であることが有力な根拠とされる)。犬飼氏が指摘するように「津」、「川」などの字訓文字の可能性が高いと思われる

が、いまその点には深く立ち入らないことにする。<sup>(25)</sup>

少なからずここで問題としたいのは、「ツ」(つの古体)は、犬飼氏の調査に拠れば「ム」や、「支」「止」などの古韓音と共起し、訓仮名と同時期に用いられることが多いという事実である。「つ」の使用は、大宝二年御野国戸籍(音訓交用が著しい)や、正倉院万葉仮名文書(乙)(八世紀後半)にも見られ、日常的な文字遣いが現われる場所でも多く用いられている。ここに挙げたような難波津木簡に、訓仮名「矢」や、「ツ」の文字が、用いられていることは、飾らない普段の文字遣いがここに現われているものと考えられるであろう<sup>(26)</sup>。

以上のとおり、難波津の歌に交用される訓仮名を見てきたが、「津」「真」「部」は、他の文字資料にも比較的多く用いられる訓仮名である。「真」は、龍角寺遺跡の文字瓦や御野国大宝戸籍に見られ、「津」は仮名書きの一般的な文字資料に多く用いられる文字である。

「部」は、大化改新以前の部民制の名残として、当時、流通していた「ことば」であり、「文字(字訓)」でもあったろう。「者」の訓仮名は、本論の二節に示した法隆寺に献納された命過幡に、「壬午年二月飽波書刀自入奉者田也」(壬午(800)年)と書かれているほか、平城宮木簡に「霧寒尔 豊継ノ久者牟也ノ久利久者牟ノ夜 久利久者ノ牟夜」(『平城宮発掘調査出土木簡概報』一三P12)、「江久礼者」(『平城宮木簡』三三〇九七号)、藤原宮木簡に「者々支」(『藤原宮木簡』一四五三号)などと用いられ、文字テキストには多く見られないが、日常的な文字として使われていたことが知られる。

ここで前節までに述べてきたことを確認しておくが、そもそも「音」「文字」に表わすという行為において、それが一音節であるならば、訓仮名・音仮名の出自にかかわらず、「仮名」 書記者の意識として

は、単に「文字」、で書くことは可能であったと思われる。文字を日常的に用いる人々にとって「文字を書く」ということは、「一音節」に対応する「文字」を選ぶことが、最大限に注意を払われるべきことであって、その出自、つまり音が訓かということとは、「ことば」をまず「文字」に留める段階では、「二の次となること」がらだったのであろう。少なくとも、音節が確定する文字でさえあれば、「ことば」への直接的な復元は可能であり、その時点で既に「文字」は、「文字」としての機能を全うしているといえる。

「作久矢己乃波奈」<sup>(元)</sup> 矢己乃者奈夫由己<sup>(和)</sup> 伊真者々留部止<sup>(未)</sup> 伊己冊利伊真役春マ止作古矢己乃者奈」などの文字列は、一見、整えられた文字に馴化した目からすれば、「無秩序」に音訓仮名が交用されているかのようなものである。しかし、これらの文字列は、「さくやこのは」「いまははるへと」などと「(最低限に)読める」ということにおいて、何ら問題はなく、「伝達」という機能そのものが損なわれているわけではない。

おそらく、常用的な書記においては、音仮名・訓仮名という分け隔てはなく、「一律に「文字」として把握されていたと思われるのであり、それを交じえて用いることに忌避的な意識はなかったものと思われる。

## 五 上代木簡資料にみる和歌の音訓交用表記

次に、難波津歌以外の和歌木簡資料に見られる音訓交用例を次に挙げる。

飛鳥池遺跡出土木簡

(七世紀末)【木簡】

「飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報訂正」『飛鳥・藤原宮発掘調査

出土木簡概報(十五)』2002・3に拠る)、『木簡研究』二十一号[1999・11]

「(表) 止求止佐田目手」<sup>(和)</sup> 「(裏) 久於母閉皮」<sup>(羅)</sup>

平城宮木簡 (天平末頃)【木簡】

(年代推定は、『平城宮発掘調査出土木簡概報』、『平城宮木簡』

(一)の解説参照)、『平城宮木簡』(一)七九号、第十三次発掘短冊形木簡、別筆部分)

「津久余々美宇我礼」

平城宮木簡 (天平末頃)【木簡】

『平城宮木簡』(一)一七四号、『平城宮発掘調査出土木簡概報』第十三次発掘不定形木簡、別筆部分)

「田延之比等々流刀毛意夜志己々呂首」

平城宮木簡 (『平城宮木簡』(三)二九二七号)【木簡】

「(表) 以津波里事云津々」(裏)人 (『平城宮木簡』(三)三〇九七号)

平城宮木簡 (『平城宮木簡』(三)三〇九七号)【木簡】

「春春日 養」<sup>(和)</sup> 江久礼者」 (『平城宮木簡』(三)三〇九七号)

正倉院文書(僧正美状、天平寶字六[732]年)【文書】

「春佐米乃 阿波礼」

は、同時に出土した木簡に丁丑(677年)の木簡が見られ、天武朝の文字資料であることが知られているが、「田」「目」「手」の訓仮名が音仮名に混って用いられている。

橋本四郎氏前掲論文(p.32)によれば、「万葉集」に用いられる使用頻度の高い訓仮名は、「日」「名」「手」「見」「田」「津」「目」「屋」の文字であることが指摘されている。いま挙げた「田」「目」「手」

「津」などの訓仮名が見られるのも、この状況に適っているもので、決して偶然ではないであろう。

は、平城宮跡から発掘された木簡で、「月夜良みつかれ」と読める。この資料からは、「津」が訓仮名であるだけでなく、他の仮名についても幾つか注目される点が窺える。すなわち、「余」の文字には、甲乙二種の混乱が見え、また「我」の文字には、清濁の混乱が見られることである。このような在りようは、木簡にも指摘できることで、「絶えし人と取るともおやし心そ」と読める「志」が、清濁を無視した表記になっているほか、「刀」の文字には甲乙の混乱もみられる。

上代文献の清濁のことに少しく触れるが、音仮名については従来より幾つかの研究成果が得られ、その書き分けのことが論じられている（本居宣長、石塚龍麿、大野晋氏<sup>27)</sup>）。その後、西宮一民氏、鶴久氏らによって、借訓についても同様、清濁の書き分けがあることが指摘されるようになった。しかし一方で、橋本四郎氏は、次のように述べておられる<sup>28)</sup>。

清音仮名・濁音仮名が存在することは、語形の正しい表記が目ざされてゐたためである。けれどもそれはあくまで目標であり、表記された結果とは、あらゆる点で一致するとは限らない。結局のところ、文字の清濁と語の清濁とは別次元に位する概念であつて、文字と語形の清濁が喰ひ違つても、決して矛盾と見なすには及ばないのである（傍点引者）。

ここで注意されるのは、字音仮名そのものに清濁はあつたであろうが、それが語形に直接反映するかという点では、慎重にならなければならぬという発言である<sup>29)</sup>。

すなわち、文字そのものから清濁がはつきりとは読みとれないとしても、それを「ことば」に還元することは不可能なことではないのである。

このことはこのような文字遣いが「最低限に読まれるべき」レヴェルの文字遣いであつたことを証明するものと考えられる<sup>30)</sup>。

## 六 まとめ

以上、本論では、万葉集の音訓交用表記、および、木簡に見られる和歌資料の音訓交用表記を順次、例を挙げて論じてきた。

そして、万葉集や古事記などの書記テキストから帰納されてきた提言音訓交用の形式は特別な場合にのみ存在し、「無秩序」な交用は極めて少ない、といった提言とは異なり、音訓交用の仮名書きが七世紀から八世紀の一般的な和歌の書記法として、存在していたことを指摘したものである。もちろん、それらの文字用法は、「公」の「記録」を主としたようなものではなく、官人および下級官人層が、実用的な場面において用いた文字であつたことは論を俟たない。

それは、用いられる文字が略体字であつたり、上代特殊仮名遣いの甲乙を混同した用字を含むなど、これらの文字が、おそらく「読めればいい」というレヴェルの文字であつたろうことを予測させるものである。これらは、木簡に和歌を書く場合などに共通して見られ、音・訓仮名の交用や、仮名字母に画数の少ない文字が選ばれるという現象は、「日常的な文字」のすがたが現われたものと考えられるであろう。

「うた」が日常的に書かれること、それはもちろん、教養として「うた」を学び習ふこと、また記憶の中の「うた」を書き留めることなど、数多くその機会があつたと考えられる。しかし、「うた」を単に「音律を留める」という機能としてではなく、それを意匠するものとして文字が意識された場合、そのとき「うた」の「文字」は、どのように変



革を迫られるのか。

万葉集の文字が日常の文字としてではなく、戯書や義訓などのさまざまな文字意匠を混じえ、彼岸の文字を取り込んだ「文字」として立ち上がってくる現象は、「実用・日常」の書記資料から、そもそも相対化するこのできない問題なのではなかったか。

しかし、このように問い返しつつも、音訓を交えて用いる書記体が、万葉集の歌々に幾つか顔を覗かせてくるのは、いったい如何ような理由に拠るのかというような問いにも、やはり我々は正面から、答えねばならないだろう。

古事記や日本書紀のように漢文体の発想から「ことば」が成り立つのではない、「やまとことば」を織り畳んでいく「うた」において、ことばの日常性、生活空間に直に密着した「ことば」を操ること、それはおそらく無意識的にであれ、文字用法の上でも、その「日常性」を引き摺ることにならざるを得ないのではないか。さきに示した、万葉集仮名書き歌巻の一首節訓仮名などの現われは、そのような方向性の中において捉えられるべき問題であると思われる。文字資料に見られる仮名書きの在り方とともに、今後、考えを深めていきたいと思う。

## 注

(1) 「交用表記」について、稲岡耕二氏は、次のように指摘する。「一般に交用表記という場合、一単語内において、音仮名訓仮名を交え書いている現象を指すのか(二音節語にあつては音仮名各一、三音節語ではないが二、四音節語の場合は三対一もしくは二対二の比率になる)、それとも一連の表記においても音仮名訓仮名が交互に現われる現象をいうのか、その点は必ずしも明瞭でない。」(『万葉集における単語の交用表記』、『国語学』七〇号1967・9初出、『萬葉表記論』塙書房1976・11p506)

(2) 『立教大学日本文学』六十二号1989・7初出、『日本古代の表記と文体』吉川弘文館2000・5。

(3) 「万葉仮名の成立」(『立教大学日本文学』六十四号1990・7)、「万葉仮名と文章文体」(『万葉集研究』第十七集1989・11)においても、「音訓交用」は、漢字仮名交り文への橋渡しの用語として用いておられる。「音訓交用について」(松村明先生喜寿記念国語研究、1993・10初出、後に「音訓の交用」として、『日本古代の表記と文体』所収)、「人麻呂歌集とその後の上代表記」(『国語と国文学』七十七巻十一号2000・11初出)。

(4) 「訓仮名をめぐって」(『萬葉』三十三号1959・10初出、『橋本四郎論文集 国語学編』1986・12 p36)。

(5) 稲岡耕二氏「万葉集における単語の交用表記」(注1論文)に拠る。氏が「訓仮名が否か判断の微妙なものもあり、それらもなるべく拾ってゆく方針をとった」(p507)と断るように、その用例数はかなり広範に拾った結果である。全用例を掲げた末尾に「万葉集において、一単語を(今日われわれの常識的な文法の単位を主としていう)音訓の仮名の交用で記したものは四百近くあげたる」と述べる(p563)。

(6) 山口佳紀氏「訓仮名の役割 一字一音の場合」、『古事記の表記と訓読』有精堂1995・9 p272)。

(7) 上代文字資料の音訓交用の実際例については、拙稿「上代文字資料における音訓仮名の交用表記 難波津の歌などの木簡資料を中心に」(『高岡万葉歴史館紀要』十五号2005・3)、「難波津の落書 仮名書きの文字資料のなかで」(『国文目録』四十四号2005・2)を参照されたい。

(8) 池上禎造氏「巻十七・十八・十九・二十論」(『万葉集講座』六 春陽堂1972)、「土居光知氏『古代伝説と文字』(岩波書店1960・7p154~p157)」、稲岡耕二氏「巻五の論」(注1著書)など。なお、この考え方は、奥村悦三氏が仮定する、正用体、通用体、俗用体の三様式の在り方に拠る(正用体・通用体の用語は、『亀井孝論文集四 日本語のすがたところ』に則ったものである)。奥村氏は次のように述べる。「ただ、用字層は、用字圏の違いとは異なり、その一つを選んだ人が無条件に他を排除するといったものではなかったらう。上位の用字層を使いこなせる人なら、単に通俗の字母を取りいれるだけで、それより下位の用字法を使つてみることが可能だったらうからである。逆の場合も、仮名の基本的原則

字音のこと、とか　を理解する必要があるという点でそれなりの困難があるとはいえ、知識を得るにつれ俗用体から通用体へ、さらには正用体へと移りゆくことが可能ではあったろう。しかし、人が何かを書くとしたとき、それをどの用字層のものにするかは、ただ一とありにしか選択できなかったように思われる。萬葉集も、その意味で、積極的に通用体を選んでいと言わなければならないように思われるのである。萬葉集に、正用体で書かれた歌も含まれているかもしれない。だが、それは、正用体を含みうるのが通用体のありかただったからであらう。俗用体で書かれた歌はどうされるか　それは、排除されるか、書きなおされるしかなかったであらう。」「かなで書くまで　かなとかな文の成立以前」

『萬葉』一三五号(1990・3)。

(9) 橋本四郎氏「訓仮名をめぐって」(p23)

(10) 津之地直一氏「万葉集に於ける訓仮名」(『萬葉集の国語学的研究』1975・6)

(11) 川端善明氏「万葉仮名の成立と展相」(『日本古代文化の探求 文字』社会思想社1975・7)

(12) 川端善明氏(注11)論文p132、小林芳規氏「表記の展開と文体の想像」(『日本の古代 ことばと文字』中央公論社1988・3)

(13) 金沢英之氏「天寿国編帳銘の成立年代について 儀鳳暦による計算結果から」(『国語と国文学』七十八巻十一号(2001・11))は、持統朝以降であると指摘する。

(14) 参考までに、東野治之氏「長屋王家木簡の研究」(『塙書房』1996・11 p124)の釈文と訓読を挙げる。

1、壬午年二月、飽波書刀自<sup>あくなみのふみし</sup>の入れ奉る者田(幡)なり。

2、癸亥年、山部五十戸の婦、命過ぎにし為、願ひて造れる幡なり。

なお、2は、「山部の五十戸婦の為に命過るとき願ひて」と訓む説あり(小林芳規氏「表記展開と文体の創造」『日本の古代 ことばと文字』中央公論社1988・3)。「五十戸婦」は「サトトジ」と訓むか(平川南氏「里刀自小論」『国立歴史民俗博物館研究報告』六十六集1996)。

(15) 狩野久氏「法隆寺幡の年代について」(『伊珂留我』1984・10)は、2の墨書幡銘に加え、「辛酉年三月朔六日山部殿如在形見為願幡進三寶内(辛酉年三月朔六日、山部殿在りし形の如く見む為、願へる幡。三寶の内

に進む。)」の幡銘ほか一点を加えた三点について、それまで養老年間のものとしていた説を覆して、その成立年を六十年遡らせて、それぞれ、癸亥年(六六三年)・辛酉年(六六一年)・己未年(六五九年)とした。いま、紀年を記す七世紀代の木簡は、次々と出土してしているもので、従うべき見解であると思われる。但し、東野論文(注14)は、癸亥年は七三年か、六六三年とするものの、辛酉年は七二年とする(p124)。なお、「辛酉年」の幡銘は、「形見と為て願える幡」と読む説あり(新川登亀男氏「法隆寺幡銘管見」(『東アジアと日本』宗教・文学編、吉川弘文館1987・12)。

(16) 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(十三)」、『徳島県埋蔵文化財センター調査概報二観音寺木簡』1999・3に拠る。

(17) 川端氏は、交用表記について次のようにも言つ(注11論文p151)。「仮名が訓仮名かという、仮名としての出自を問題にしなければ　つまり、意義との関係の差を捨象できる限り、これは仮名としての平等さ、或いは表音することの平等さを意味するであらう。例えば草仮名の字母に音仮名と訓仮名が区別なく同居しているようなそれを、すでにここにイメージしておいてもよい。そして以上のことは、もっとも基本的な意味での、よむための工夫であった。(傍点ママ)」

(18) (注8)奥村論を参照のこと。

(19) 東野治之氏「出土資料からみた漢文の受容 漢文学展開背景」(『国文学』四十四巻十一号)は、「作」の文字は「佐」の可能性も残るとする。

(20) 「役」は、「彼」「波」の可能性があるという(館野和己氏「日本古代木簡の特徴と表記」、於奈良女子大シンポジウム、古代日本語を読む 東アジアの文字環境、2003・1の講演に拠る)。

(21) 川崎晃氏「気多大神宮寺木簡と難波津歌木簡について 高岡市東木津遺跡出土木簡補論」、『高岡市万葉歴史館紀要』十二号2002・3に紹介がある。同氏「越」木簡覚書 飛鳥池遺跡出土木簡と東木津遺跡出土木簡」、『高岡市万葉歴史館紀要』十一号2001・3)も参照のこと。

(22) 東野治之氏「平城京出土資料よりみた難波津の歌」(『日本古代木簡の研究』塙書房1983・3 p170、図版あり)

(23) 難波津歌における、習書か、落書かといった問題は、拙稿(注7)論にて扱った。

(24) 「皮」の字音表記については、犬飼隆氏「万葉仮名「皮」をめぐって

- 万葉仮名前史試論「『上代語と表記』おつふ(2000・10)に詳しい整理があるので参照されたい。「皮」の字音は、印旛郡龍角寺五斗時瓦窯跡遺跡に「赤加皮真(あかはま)」と用いられるほか、大和国添下郡京北班田図「赤皮田池(あかはたいけ)」、静岡県大和波峠廃寺出土墨書土器「大皮寺」文化庁編『発掘された日本列島』朝日新聞社1988、飛鳥池木簡「止求止佐田目手」「久於母閉皮、飛鳥池音義木簡、蜚戸皮伊之、滋賀県大津遺跡音義木簡、精久皮之」などの用例が見られ、近年、多くの出土文字資料の事例が中央・地方を通じて指摘されている。
- (25) 「つ」の字源については、犬飼隆氏「万葉仮名に内含されていた片仮名・平仮名への連続面」万葉仮名の字体と使用場面の相関「ツ」の字源「『上代文字言語の研究』笠間書院1992c)、鈴木男氏『つ・ツ』の字源をめぐる問題について」(『甲南大学文学論集』三十九号、『初期点本論攷』桜楓社1979・4に所収)、東野治之氏「金石文・木簡」(『漢字講座』5古代の漢字とことば、明治書院1988・7)に詳しい。上掲の「難波津」の和歌木簡に「津」と書かれたものがあること、上代文字資料の仮名書きに見られる音訓交用に、訓仮名「津」が多いことなどから、「つ」は訓仮名「津」の可能性が高いように思われる。そもそも「津」「川」の文字を諸氏が否定し「州」「閭」などを字源として考えたのは、それが訓仮名であったことによるが、このような音と訓が交用されることの実態が明らかとなつたいま、それを根拠に否定し去ることはできないであろう。なお「難波津」の「津」には意味への配慮が考えられることも、訓仮名の成り立ちを考える上で興味深い。
- (26) 東野治之氏(注19)論文には、観音寺遺跡の難波津の歌の訓仮名「矢」について、「難波津の歌が地方にも普及していた証として意義深い。また表記の上では、「矢」のような訓仮名を交えることが注意され、日常レベルでの表記意識をうかがうことができる。」と述べる。また犬飼隆氏「観音寺遺跡出土和歌木簡の史的位置」(『国語と国文学』七十六巻五号1985・5)も同様「訓仮名「矢」の使用も、日常・ふだんの性格がある。先にふれたとおり、訓仮名の使用は画数の少ない音仮名と共起する傾向があり、その場合は清濁の書きわけも厳密でない。」と述べている。
- (27) 大野晋氏『上代仮名遣の研究』(岩波書店1953)ほか。
- (28) 西宮一民氏「上代語の清濁 借訓文字を中心として」(『萬葉』三十三六号1960・7初出)、鶴久氏「万葉集における借訓仮名の清濁表記」(『萬葉』三十六号1960・7初出、「借訓仮名による清濁表記」『萬葉集訓法の研究』おつふ(1996・10)所収)。橋本四郎氏「ことば」と「字音仮名」上代語の清濁を中心に「『萬葉』三〇号1969・1初出、『橋本四郎論文集国語学編』1986・12)など。
- (29) 犬飼隆氏「万葉仮名に内含されていた片仮名・平仮名への連続面」(『上代文字言語の研究』笠間書院1992・940)は、「たとえば七二一年成立の下総戸籍は七二〇年成立の日本書紀よりも清濁の書きわけがゆるいというように、同時期の文献のあいだでも書きわけの程度に相違があり、(中略)清濁の書きわけのゆるみと字母の「漢字離れ」とが相関するとすれば、書きわけの程度の相違も、文献としての性格や書き手の意識の相違から生じたと考えることができる。」と述べ、私的な文献に多く見られることを指摘する。
- (30) 濁音と清音の混乱が見られることについて、体系未確立な状態では、正確な「ことば」に対しての近似値的な「文字」が汎用していたであろうことを橋本四郎氏は指摘する。
- 一つの文字もしくは幾つかの文字の連続が、麻幾する意味に対応する語形らしさを備へて居れば、必ずしも一つ一つの音の厳密さが要求されないことも、体系未確立との条件の下で予想しておいてよいからである。しかもどの程度のところまで似ればその語形らしさを感じるかについては、個人差の生ずる可能性が甚だ高いと言はねばなるまい。
- (『ことば』と「字音仮名」上代語の清濁を中心に「『萬葉』三〇号1959・1)